



改めて言った。

「魔法は、解かなくていい」「本当にいいんですか?」

マリーは目を丸くする。 僕は席を立ち、彼女の隣に座った。

「魔法を持つ者は長い時を生きる。それは魔法をかけられた僕も同じだ」

「はい」

「君と同じ時間を生きる。それでいいと思ったんだ」

まっすぐにマリーを見つめる。 彼女も僕を見つめ返し、困ったように眉を寄せる。

「私もスミレといられるならうれしいです」 「うん」

「一緒にいたいです。スミレのご飯も食べたいし、絵も見 たいです」

「うん」

「でも私は魔女ですよ、人々からおそれられる存在です」 「知ってるよ。僕も似たようなものだ」 「私はスミレの魔法をいつでも解くことができます」 「少なくとも今の僕はそれを望んでない」

マリーは視線を下げ、言った。







「たとえばこれから、スミレとともに数十年過ごしたとします」

「うん」

「そのときに『やっぱり魔法を解いてほしい』と言われて も、叶えてあげられないかもしれないですよ」

「どうして?」

「だって、独りで生きていくのは寂しいですから」

「……そうだね。だから、一緒にいるって約束させて」

「いいんですか?」

「うん、いいよ」

僕が小指を差し出すと、マリーもゆっくり手を持ち上げる。 指切りをした。 小さな子たちがするみたいに。

それから、僕たちは旅に出るために部屋の物をまとめた。

「血の跡を追った日の夜が懐かしいです」

「何がいるかもわからないのに、よく扉を開けようとしたね」

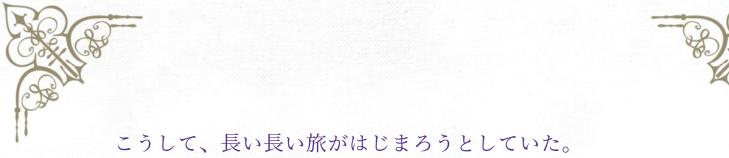
「自分以外誰も頼れる人なんていませんでしたから。でも 今は……これからは、スミレがいます」

「そうだね。行こうか、魔女様」

「からかわないでください」

僕たちは笑い合う。





魔女マリーの隣には、一人の画家がいる。 その画家は何年、何十年経っても姿がほとんど変わらず、 魔女の使い魔じゃないかという噂が流れていた。

「もしスミレが本当に使い魔だったら、使い魔を画家にする理由ってなんでしょう」

「自分の絵を美しく描いてもらうためとか? 絵は後世まで残るし」

「私はそんな、国の王様みたいなことはしませんよ」 「わかってるよ。でも、街中で絵を描いているときによく 噂を聞くよ。マリーは良い魔女だって」

「それは、授かった魔法のおかげです」

「よかったね。人を傷つけたりする魔法じゃなくて」

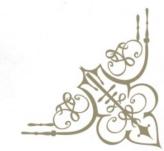
「……それ、冗談ですよね」

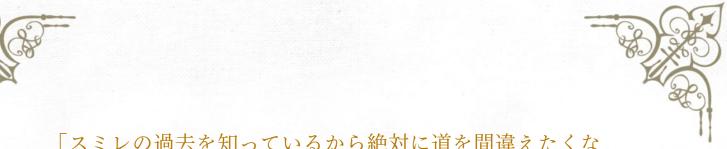
「ううん、本当にそう思ってる。マリーにそういう魔法は 似合わない」

彼は目じりを下げて笑う。

「でも、良い魔女でいられるのはスミレのおかげでもあるんですよ」 「どうして?」







「スミレの過去を知っているから絶対に道を間違えたくないって、そう思えるんです」

「そっか。役に立ててなによりだよ」

「それだけじゃないですよ。旅の中でいろんなご飯を食べましたが、スミレのご飯が一番です!」

力強くそう告げると、スミレは珍しく吹き出した。

「な、なんですか!」

「いいや。今日はなにを作ろうか」

「うーん、ハンバーグがいいです」

「魔女マリーはいつまで経っても小さい子みたいなものが すきだね」

「外見は変わらなくても中身は成長してますよ」

「ヘえ」

「スミレは少し、いじわるになりましたね」

「そうかな」

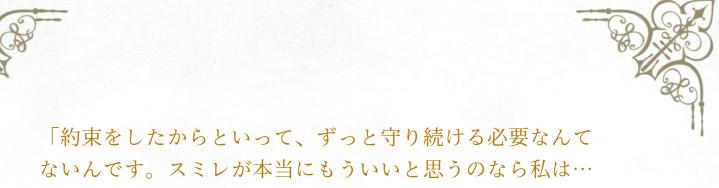
楽しそうに歩くスミレの隣。 何年、何十年と変わらない、私の居場所。 不意に足を止めた。 先を行くスミレの背に、声をかける。

「スミレ。もう十分生きたと思ったら、いつでも言ってくださいね」

「え?」







私の言葉を遮るように、名前を呼ばれる。

「僕はまだまだ絵を描きたい。見たことない景色を見て、それを額縁に収めたい」

「・・・・・はい」

…「マリー」

「君に料理を振舞って、もっと笑顔を見ていたい」

「……うれしいです」

「それに魔女マリーは寂しがりだから」

「そっ! そう、ですね」

「約束、守らせてよ」

私の目の前に戻ってきたスミレは、しゃがみ、目線を合わせた。

「不老の僕を化け物だという人もいる。でも、君が僕を人として見てくれるなら、それでいいんだ」

「当然です。出会ったときから、私はずっとそう思っていますよ」

「ありがとう、マリー」

「それは私の言葉です。スミレがいてくれるから、私はこの長い長い人生を続けられます」

「そっか」

「……これからも、傍にいてくださいね」







「うん、もちろん」

立ち上がったスミレは私の隣に並んだ。 そうして、二人で歩きだす。 これからも魔女と画家の旅は続いていく。

ED5【魔女マリーと不老の絵描き】



